



2017年10月7日(土)ー9日(月)、福島県内在住8家族27名の親子(大人11名・子ども16名)といずみスタッフ2名が参加した第2回いずみこひつじキャンプが東京YMCA 妙高高原ロッジにて実施されました。郡山駅から新潟県の妙高高原まで、貸切りバスでの移動でしたが、YMCAスタッフ5名による楽しいリードで一気に和やかなキャンプがスタートしました。ちょうど紅葉が綺麗な時期でもあり、目を奪われるような自然の美しさでした。



「チョイスプログラムも楽しく、子どもよりも夢中になって製作。素敵な作品ができて満足です。…他の家族や子どもたちとお話できました。子どもも伸び伸びと外でいっぱい遊び、いっぱい汗をかいて、いっぱい食事を食べ、いっぱい寝て、親子ともどもリフレッシュできました。」(福島市 MSさん)

「わたしは一ばんたのしかったのは『レジン』です。なぜかと言うと、できあがりがかんたんできていてかわかしているときは、早くできないかなと思ってました。できあがったとき、じょうずにできたと思いました。」(郡山市 8才・MAさん)

最終日夕方、郡山駅で名残りを惜しみつつ解散。

まだまだ必要とされている「保養プログラム」であることを実感させられました。東京YMCAスタッフの皆さんに感謝。

なお、いずみこひつじキャンプは次回の第3回が最後となります。

今後の予定 (詳しくはいずみHPなどでご案内いたします)

第1 2回三教区親子短期保養プログラム in 北海道 8月開催予定

第3回いずみこひつじキャンプ 9月開催予定

甲状腺エコー検査 in いしのまき 5月13日(日) 於:石巻市「中央公民館」



※昨年10/15(日)原田雅樹氏講演会での会場カンパ報告 26,391円 「いずみ」へのカンパをありがとうございました。

「いずみ」の活動は国内外のキリスト教支援活動によって支えられています。この活動を続けていくためにみなさまのご支援、ご協力をお願いいたします。ご支援、献金は下記専用口座をご使用下さい。

ご支援のお願い

送金先金融機関 ゆうちょ銀行  
 口座番号 02270-2-114887  
 加入者名 いずみの会  
 通信欄に 会費(一口2000円から)、又は、献金とお書き下さい。

- 運営委員長 布田秀治(いずみ愛泉教会)
- 運営委員 明石義信(常磐教会) 鈴木のぞみ(川俣教会)  
 保科 隆(福島教会) 布田秀治(いずみ愛泉教会)
- 室長 保科 隆(福島教会)
- 顧問 篠原弘典(原子核工学専門家)
- スタッフ 会津かよ子 笠松絹子 服部賢治
- 会計協力 渡辺広衛

日本キリスト教団東北教区  
 放射能問題支援対策室いずみ  
 UCCJ Tohoku District Nuclear Disaster Relief Task Force "IZUMI"  
 〒980-0012 仙台市青葉区錦町1丁目13-6  
 TEL/FAX 022-796-5272  
 メールアドレス izumi@tohoku.uccj.jp  
 ホームページ http://tohoku.uccj.jp/izumi/

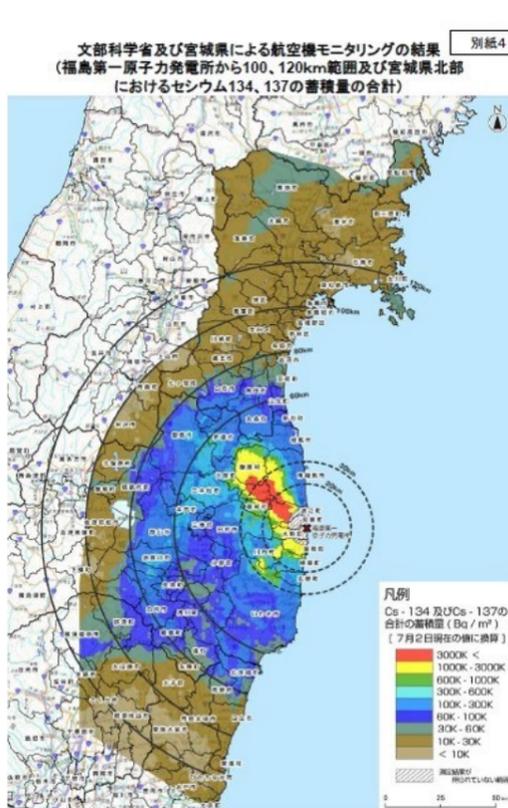
# いずみ

題字 丹治正雄氏

## 放射能と向き合った7年間で振り返って

放射能問題支援対策室いずみ顧問 篠原 弘典

7年前の東日本大震災で私の住む仙台市泉区も経験したことの無い激しい揺れに襲われました。以後電気、水道、ガスのライフラインが断たれ、しばらくは不自由な生活が続いたのですが、最初に復旧したのは電気で4日後でした。テレビが見られるようになって先ず驚いたのは沿岸部を襲った津波の凄まじさでした。そして目に飛び込んで来た、屋根が吹き飛び鉄骨が飴のように曲がった福島原発の姿を見て言葉を失いました。大学で原子核工学を学び原発の危険性を知ってからは、このような姿を見たくないために脱原発社会を一刻も早く実現したいと力を尽くしてきていたからです。



茫然自失の状態がしばらく続いたのですが、東京の水道水から放射性ヨウ素が検出され、ペットボトルが買い漁られているといったニュースが流れて来て、宮城県でもきちんと放射能が測られているのか確かめようと、宮城県の原子力安全対策課に電話を入れました。対応に出た職員に「放射能の測定は大丈夫か」と問うと、「放射線測定器を全て津波で流されてしまい測定できない状態に陥っている」との返答が返ってきて、またまた唖然としてしまいました。放射能が飛んでいるかには目に見えないのですから、きちんと測定してそのデータから起こっている事態を把握する事が大事なのですが、それができないと言うのです。宮城県は所有する全ての測定器を女川町の原子力センターに置いていたのが津波で流され、放射能が到達する前に測定の手段を失ってしまっていました。

3月17日の夜から明け方にかけて仙台でも大雪が降りました。その雪の中に放射線測定器の専門家もびっくりするような放射性ヨウ素が含まれていたという話を本人から直接聞きました。ヨウ素のピークが振り切れたそうです。後々福島原発から放出された放射能による汚染の主役になったのはセシウムという放射性核種ですが、初期の段階で飛んできた放射性ブルームにはセシウムの10倍のヨウ素131が含まれていました。人体に取り込まれると甲状腺にたまり甲状腺がんを引き起こす放射能です。しかしその放射能が大量に飛んできている事態をつかめず、屋内退避等の警告が発せられることもありませんでした。

7月になって文部科学省が航空機を使って測定した福島県と宮城県の放射能汚染地図を発表しました。日本には放射線障害防止法という法律があって、汚染が4万ベクレル/m³以上の場所は一般人の立ち入りを禁止する放射線管理区域にしなければならないと規定されています。病院のレントゲン室の様な所です。発表された汚染地図を見ると、福島県のほぼ全域と宮城県南部および北部の栗原市や気仙沼市がこの放射線管理区域相当の汚染地帯になっていました。(2・3頁に続く)

(前頁より)

この様な汚染の広がりにも機敏な動きを見せたのが子育て中のお母さん達です。宮城県議会に請願を出し、教育委員会に働きかけて校庭やプール、給食の放射能を測って対策を取るよう働きかけました。このお母さん達の集まりやパレードにも参加しましたが、子どもたちに下痢や鼻血の症状が出た、顔や手にただれや変色が起こったなどなどの話を多く聞きました。大量に飛来した放射能が粘膜や皮膚、血液に及ぼした影響だろうと考えられます。

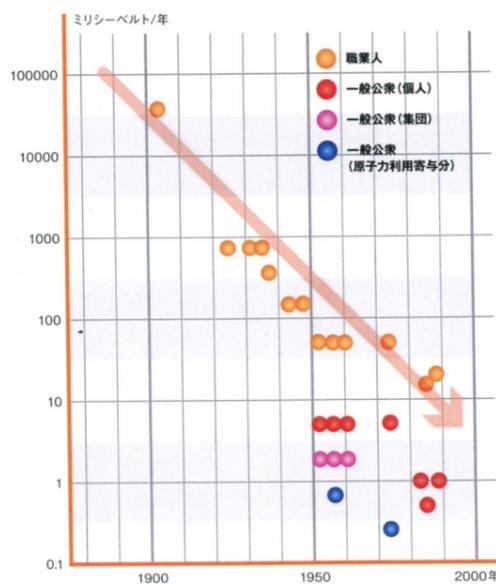
2011年秋以降、福島県では県民健康調査が始まったのに宮城県は動こうとしないので、同年12月の県議会から子どもたちの健康調査と被ばく線量調査を求める請願運動が始まりました。いろいろ紆余曲折があったのですが2012年の6月県議会でこの請願は全会一致で採択されたのです。しかし、宮城県は子どもたちのために動こうとはしませんでした。それは5人の「専門家」で組織した「宮城県健康影響に関する有識者会議」が請願採択前の2月に「宮城県の放射線レベルでは健康への悪影響は考えられず、健康調査の必要性はない」との報告書をまとめていて、それを錦の御旗にしたからです。

仙台は放射能汚染の度合いが相対的に低かった地域ですが、それでも事故から1年後の2012年4月、自宅の庭に事故前から置いていたほだ木に見事になったシイタケを市民測定室で測ってもらったところ、セシウムが58.3ベクレル/kg検出されました。食品の摂取基準100ベクレル以下でしたがさすがに食べはしませんでした。5年後の2016年4月、今度は自宅の雨どいに溜まった土を集めて計測所「いのり」で測定したところ、セシウムが19,300ベクレル/kg計測されました。放射能は時間とともに減りますから2011年の事故後に補正すると34,400ベクレル/kgという数値になります。決して小さい放射線レベルではないのです。



7年間放射能と向き合ってきて、特に感じるのは行政の不作為と専門家・科学者の決めつけです。目に見えない放射能と向き合う時に大事なものは、データを取りそれを積み重ねて起こっている事実を把握することです。2013年10月に放射能問題支援対策室いずみが立ち上がる時、とにかくデータを蓄積することが必要だからと民間で甲状腺検査に取り組むことにしました。そして少しずつですが行政の動きも作り出してきました。

福島原発事故発生後に起こっている事態の中で驚かされているのは、放射能が生命・人体にどのような影響を及ぼすのかに関して歴史的に積み重ねられてきた知識と基準がいたも簡単に塗り替えられてしまったことです。私が原子力を学び始めた1970年頃、放射能のいわゆる「許容量」(正しくは「被曝限度」)は一般人が5ミリシーベルト、職業人が50ミリシーベルトだと講義で教えられました。これは放射線被ばくの調査・研究の長い歴史の中で把握された知識を基に、国際放射線防護委員会(ICRP)が勧告し国が法律で定めている基準です。その後更に積み重ねられた調査・研究でこの「許容量」でも危険性が高いので、1990年のICRP勧告から一般人が1ミリシーベルト、職業人が20ミリシーベルトと改められ、法律となっていたのです。それが、起こらないとされていた事故が起こった途端、反故にされてしまいました。100ミリシーベルト以下では健康への悪影響は考えられない、20ミリシーベルト以下ならば避難指示を解除して帰還しても良いと言う科学者・専門家って何だろうと、長い歴史を見てきた立場からは思わせられます。



放射線「許容量」の変遷(概略)

放射線の影響を見る時に難しいのは、同じ線量を浴びても影響の出方に個人差があるのと、放射線に特有の症状があるわけではないことです。白血病にしろ心筋梗塞にしろ放射線被ばく以外の原因でも起こるので因果関係を立証することが難しいという壁があります。大量に浴びれば全員が死亡する(全致死量8シーベルト)あるいは半数が死亡する(半致死量4シーベルト)という被ばく量があります。しかし低線量被ばくでは放射線障害が出るか出ないかに個人差があり「がん当たりくじ論」で説明する科学者もいたりします。ただ低線量でも、ある集団が浴びた線量の総和(集団被曝線量)とがんで死亡する人数には評価できる因果関係があり、種々の機関や研究者によってガン死危険度が評価されています。右の表がその評価ですが、一昨年講演していただいた京都大学原子炉実験所の今中哲二さんは一万人・シーベルトの集団被曝線量でのガン死者数は600人~2000人と評価しています。被ばくした集団の人数とそれぞれの被ばく量の総和ですから人・シーベルトという単位で表しますが、一万人・シーベルトとは一万人が1シーベルトずつ浴びた場合であり、また一千万人が1ミリシーベルトずつ浴びた場合も集団被曝線量は一万人・シーベルトになります。もっとも評価の低い1990年のICRP勧告でも500人はガン死するという結果になっています。

評価者(年)	ガン死者数
ICRP (1977)	125
米国科学アカデミー (1980)	10 - 500
ゴフマン (1981)	4000
今中 (1986)	600 - 2000
放射線影響研究所 (1987)	1700
国連放射線影響委員会 (1988)	400 - 1100
米国科学アカデミー (1990)	800
ICRP (1990)	500

福島原発事故から7年経って、半減期(放射線を出しながら半分になる時間)2年のセシウム134が急激に減って初期の30%位までは放射線量が下がってきていますので、放射線管理区域にしなければならない地域は大幅に縮小してきてはいます。しかし、これからの汚染の主役であるセシウム137は半減期が30年ですから、これからは汚染状況は緩やかにしか改善していきません。安心せずに放射線被ばくを低減する努力(外部被ばくも内部被ばくも)を続けることは必要です。

図7 慢性疾患のある子どもと健康な子どもの割合(ウクライナ)



『放射能汚染が未来世代に及ぼすもの』  
綿貫礼子編(新評論社刊 2012年3月)より

チェルノブイリ原発事故の汚染地帯で暮らす子供たちのうち全く健康と言えるのは2割位で、あとの8割は何らかの疾患を複数抱えているというデータをこれまでいろいろ見てきました。先日エマオで講演された山崎知行医師が示された慢性疾患を抱えた子どもたちの割合が時間を経るごとに多くなっていった経緯を表すグラフを見て、暗い気持ちになりました。福島原発事故の汚染地帯で暮らす子供たちの未来と重なって見えました。放射能問題支援対策に取り組む私たちの実践が、少しでもその様な状況の防波堤になればと思います。

福島原発事故で放出された放射能は広島原爆で撒き散らされた放射能の168発分だと言われています。広島に被爆者の放射線被ばくによる苦しみは73年経った今も続いています。7年経って放射線量が減ったとはいえ、初期被ばくの影響にしろ、その後の低線量被ばくの影響にしろ現れてくるのはこれからです。

油断せず、気を緩めずに放射能問題とこれからも向き合ってください。

# 【報告】2017年度甲状腺エコー検診結果

## 放射能問題支援対策室いずみ

## 宮城県内での甲状腺エコー検診

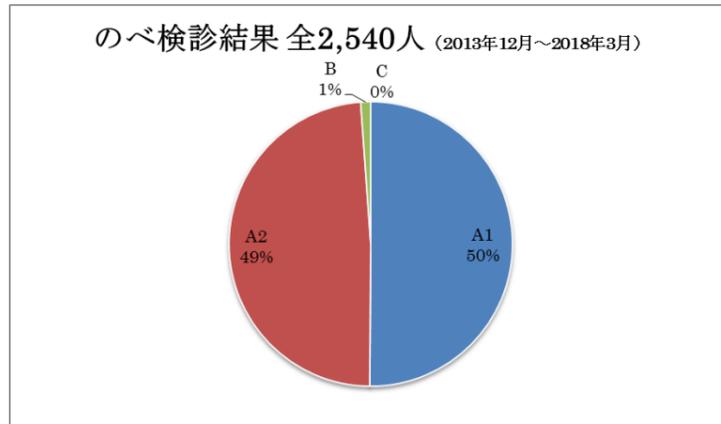
## 4年4ヶ月間で のべ2,540人が受診

日頃からのお祈り、  
ご支援を誠にありがとうございます。  
ございます。

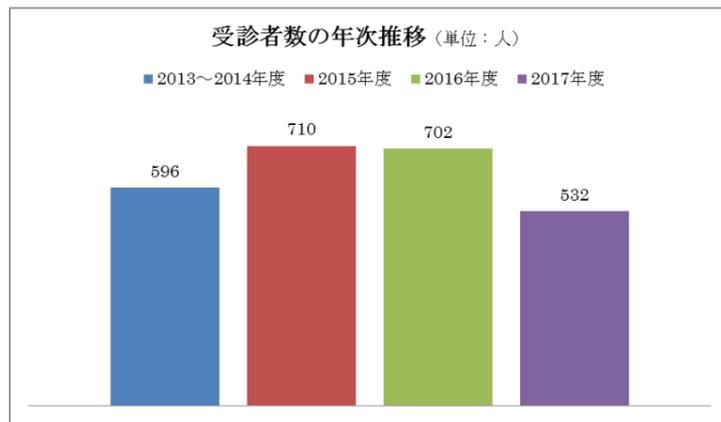
2011年3月11日に発生した東京電力福島第一原子力発電所事故から7年の月日が流れました。現在の科学技術では人為的に無害化できない、膨大な量の放射性物質が環境中に放出され、事故発生県である福島県はもとより、宮城県や茨城県、栃木県や群馬県などの広域において、大気や水、土壌など、ありとあらゆるものが放射能に汚染されました。

事故当初の初期被ばく量がよくわからず、半減期が約30年というセシウム137をはじめとする放射性核種が存在し続ける環境下での営み・子育てが避けられない中、宮城県内においても放射能による健康影響を確認できる具体的な機会提供のために「いずみ」は2013年12月から、医師のご協力をいただき県内各地で甲状腺エコー検査を実施しています。

絶対数としては少ないものの、検査活動を通して積み重ね、見えてくるものを判断材料の一つとして受診者さまやみなさまへ提供、社会共有させていただくためにも、今号で2017年度の検診報告を行います。



A1 1,273人 A2 1,238人 B 29人 C 0人



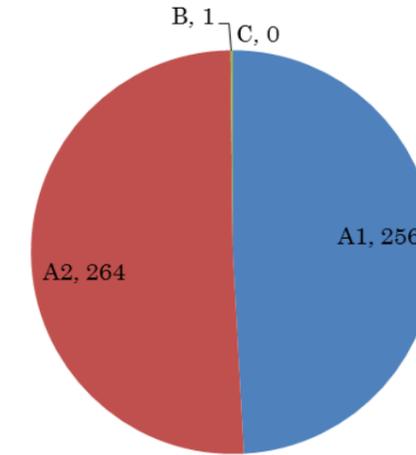
### ご支援・ご協力をありがとうございます (敬称略)

西尾正道、寺澤政彦、藤田操、大塚純一、溝口由美子、今川篤子、山崎知行 (以上、医師)、たらちね、宮城民医連 各地域での主催・協力団体のみなさま、検診スタッフのみなさま 自治体や行政関係者のみなさま、教区・教団・全国教会のみなさま 国内外のご支援いただいている全てのみなさま

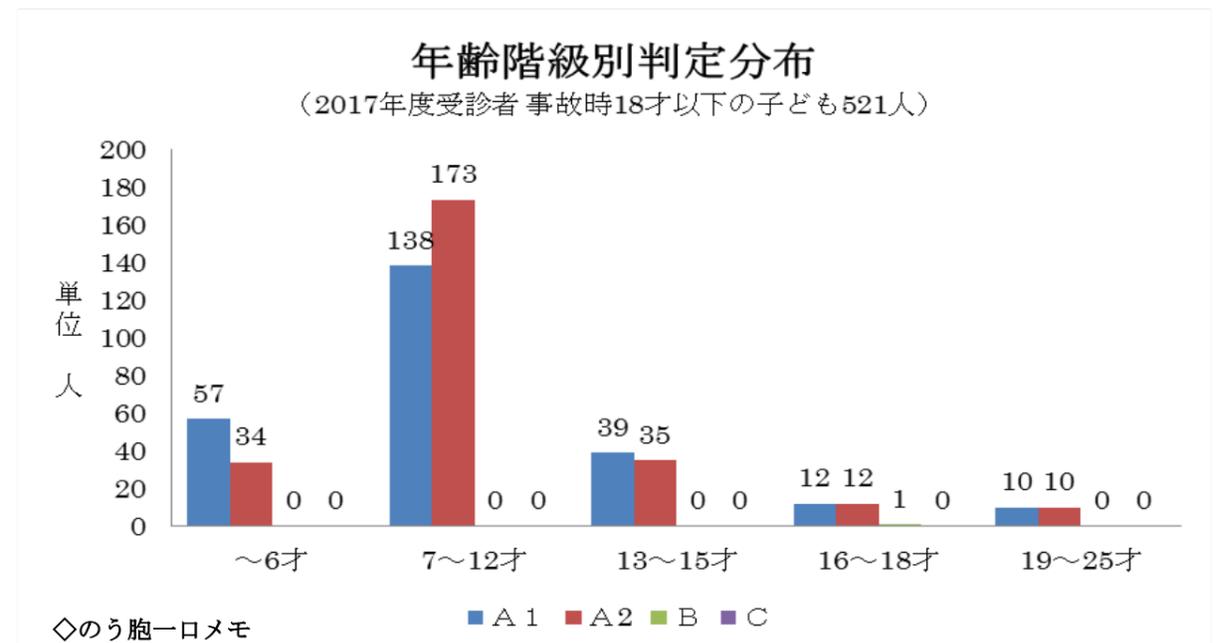
2018年度以降もどうぞよろしくお願いいたします。

2017年度検診結果 事故時18才以下の子ども521人 (単位:人) **全532人**

## 2017年度



福島判定	内容	解説
A1	結節やのう胞を認めないもの。	現時点では何も見あたらず問題ありません。
A2	5mm以下の結節、 20mm以下ののう胞を認めたもの。	小さなのう胞や結節（しこり）が見つかりました。特に心配することはありませんが、経過を観察していきましょう。
B	5.1mm以上の結節、 20.1mm以上ののう胞を認めたもの。	二次（精密）検査をおすすめします。
C	直ちに二次検査を要する。	専門医・機関での二次（精密）検査が必要です。



のう胞は結節（しこり）とは性質が違い基本的には心配ない所見です。一般的には子どもの生育とともに発生するものとみられ、成長が落ち着くと無くなるのではないかと考えられています。2017年度年齢階級別判定分布表のデータからも、6才までのA1、A2の位相と7～12才のそれが逆転していることを顕著に見ることができます。

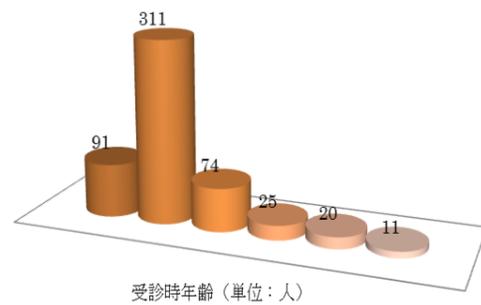
2017年度を含め、これまで「いずみ」が実施した検査において、甲状腺がんが疑われる方はおられませんでしたが、二次検査先を紹介しているB判定の方、そして、小さな結節（しこり）が見られるお子さんがおられ（A2）、継続的な観察が必要な方がおられます。

福島県が実施している「県民健康調査」の甲状腺検査において、1巡目検査で全く問題ないA1判定や、のう胞、又は、小さな結節が観察されA2判定であった、計65名のお子さんが約2年後の2巡目検査において甲状腺がんや悪性疑いと確認されています（2017年12月31日時点）。低線量被ばく（原発事故）による健康影響についての確定的評価が確立していない現段階において、一度受けた検査でA1やA2と判定され、大丈夫であっても、「いずみ」では継続・定期的な甲状腺検査の受診（観察）をお勧めしています。

年度	A1	A2	B	C	受診者数 (カッコ内大人)
2013～2014年度	297人	285人	14人	0人	596 (13) 人
2015年度	347人	353人	10人	0人	710 (1) 人
2016年度	366人	332人	4人	0人	702 (1) 人
<b>2017年度</b>	<b>263人</b>	<b>268人</b>	<b>1人</b>	<b>0人</b>	<b>532 (11) 人</b>
合計	1,273人	1,238人	29人	0人	2,540 (26) 人
	50.12%	48.74%	1.14%	0%	

期間	2017年度 2017年4月～2018年3月	累計 2013年12月～2018年3月	備考
総検診者数	532人	2,540人	複数回受診者を含む
事故時18才以下の子ども (事故後出生者も含む)	521人	2,514人	複数回受診者を含む

2017年度受診者年齢分布 全532人 (2017年4月～2018年3月)  
 ■～6才 ■7～12才 ■13～15才 ■16～18才 ■19～25才 ■大人(事故時19才以上)



甲状腺エコー検査の様子  
 寺澤政彦医師 (てらさわ小児科・仙台市)

事故時18才(検診時25才)以下  
 受診者521人の平均年齢は9.9才

県内外各地から希望する親子が受診  
 甲状腺エコー検診「いずみ」  
 2017年度

2017年度受診者居住地域 全532人  
 (2017年4月～2018年3月)

市町村 (受診時)	受診者数 (事故時19才以上=大人含む)
仙台市	193人
角田市	93人
加美町	61人
白石市	44人
名取市	42人
蔵王町	30人
その他	69人

※その他内訳  
 秋田県仙北市

以下、宮城県内市町村  
 大崎市、美里町、石巻市、  
 東松島市、松島町、  
 利府町、塩釜市、多賀城市、  
 七ヶ浜町、大和町、富谷市、  
 亘理町、岩沼市、村田町、  
 柴田町、大河原町、丸森町



超音波検査機器  
 GE社製LOGIQ

放射能問題支援対策室「いずみ」 2017年度甲状腺エコー検診

No	開催日	実施地域など	検診者数	検診医師(敬称略)
第38回	2017年4月23日	蔵王町	29人	溝口由美子
第39回	2017年5月21日	仙台市・エマオ	51人	寺澤政彦
第40回	2017年6月25日	白石市	47人	寺澤政彦
第41回	2017年7月23日	仙台市・エマオ	32人	今川篤子・寺澤政彦
第42回	2017年8月26日	名取市・名取教会	53人	寺澤政彦
第43回	2017年9月17日	仙台市・エマオ	42人	寺澤政彦
第44回	2017年11月18日	仙台市・いずみ愛泉教会	62人	寺澤政彦・山崎知行※
第45回	2017年12月23日	角田市	48人	溝口由美子
第46回	2018年1月28日	仙台市	38人	今川篤子
第47回	2018年2月25日	角田市	61人	寺澤政彦
第48回	2018年3月25日	加美町	69人	寺澤政彦

計 11会場 合計 532人 (事故時19才以上の大人11人含む)

※山崎知行医師－医療・健康相談、検査結果説明のための参加